



# 筑紫女学園大学リポジット

## 明治期家永豊吉のペルシア行とその自然観察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/488">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/488</a>

# 明治期家永豊吉のペルシア行とその自然観察

大 津 忠 彦

## Toyokichi Ienaga's Experiences of Persia in the Meiji Era and His Nature Observations

Tadahiko OHTSU

### はじめに

筆者はこれまでに、近代（明治期）における日本（人）の西アジア理解について、その幾例かを採りあげてきた。それらはおもに明治期先覚者たちの「ペルシア」観察記に伺われる異文化・環境の受け捉え方の如何を主題としたものであった<sup>(1)</sup>。このたび検討対象とするのは家永豊吉（1862年12月6日〔文久2年10月15日〕～1936〔昭和11〕年12月29日）による『西亜細亞旅行記』（1900〔明治33〕年、民友社）である。資料底本としては「国立国会図書館近代デジタルライブラリー」が公開するデジタル化資料を利用したが、判読し辛い画像箇所が少なくないため、復刻本『明治シルクロード探検紀行文集成』（1988年、ゆまに書房）第16巻所収『西亜細亞旅行記』を併用した。

『西亜細亞旅行記』の記載するところに拠れば、家永豊吉は1899（明治32）年7月26日にブーシェフル（＝家永豊吉記載「ブシール」）上陸よりペルシア入国後、陸路テヘラーン（＝家永豊吉記載「テヘラン」）に至り、同年9月21日にバンダレ・アンザリー（＝家永豊吉記載「アンザリー」）より離錨、ペルシアを離れた。ペルシアの地の旅行およびその前後を含めての見聞・体験を「國民新聞」宛に寄稿し、これらが一括されたものが『西亜細亞旅行記』である。その上梓については、家永豊吉を「余が同年學友也」（11頁<sup>(2)</sup>）とする徳富蘇峰（1863年3月14日〔文久3年1月2日〕～1957〔昭和32〕年11月2日）による該書所収の序文に窺い知ることができる（■は引用文の意、以下同様）：

■「旅行中の興味多かりしは勿論、其の困難亦た想像し易からず。特に波斯を縦貫して裏海に達

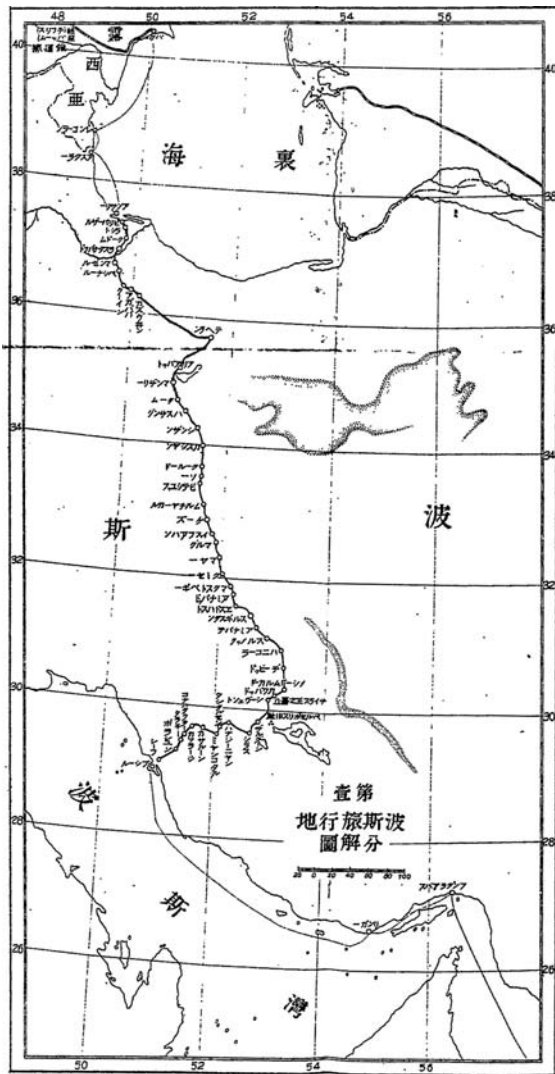


図1. 家永豊吉ペルシア旅程  
(復刻本所収図版より)

外遊目的の詳細については別稿を要するものの、テヘラーンにおいて「国王陛下」謁見の際の家永豊吉「上奏文」、あるいは「ペルシア」の現状を概述する関連箇所、さらには帰路経由地での視察行動等からも窺い知ることができる：

■イランの阿片は現に日本の新領土なる臺灣に於て其土民の需用に應ずる為め其重なる市場を發見し (128頁)

■波斯の重なる輸出品は阿片、乾菓物、絨氈、羊毛、生糸、煙草等にして (151頁)

■ベナレスを發しガジパー パトナ等を経てカルカッタに着すガジパー パトナは印度政廳阿片製造所所在地にして余が印度旅行の本務は重もに此等製造所の視察にてありき (221頁)

なお、家永豊吉の徳富蘇峰宛「書牘」は都合7信より成り、それらのうち「第二信」から「第

したる行程の如きは、福島少將<sup>(3)</sup>を除くの外、本邦人に於ては君を除ひて未だ之れあらず<sup>(4)</sup>。君や時としては賊難に出會し、(中略)然るに此の危険と困難との際に於て、屢ば余に向て書牘を寄られたるは、余が深く感謝する所なり。その書牘は首尾連続、恰も一篇の西部亞細亞旅行記たり。余は徒に斷片として、之を新聞に掲載せんより、寧ろ一書として、世に公するの適當なるを認め、君と相議して之を刊行することとなしぬ。」(11-12頁)

そもそもこの外遊の目的は、前年(1898 [明治31]年)に「台湾總督府民政長官」就任の後藤新平(1857~1929年)が『西亞細亞旅行記』に寄せた「序」にいみじくも記している：

■君ハ臺灣總督府製葉所ニ職ヲ執リ而シテ臺政ノ最重要タル阿片制度關係事務調査ノ任ニ膺リ印度波斯及土耳其ノ各地ニ旅行シ阿片調査ヲ主トシ旁ラ彼印度政府ノ施政ト我殖民政策ト相關係スル者ヲ悉セリ (5-6頁)

五信」までの文面が、今回対象とする家永豊吉によるペルシアレポートとなっており、各書信の見出しは下記の通りである：

「第二信 明治三十二年八月十三日シラスに於て」(42頁)

「第三信 明治三十二年八月三十一日波斯國イスファハン英國領事館に於て」(82頁)

「第四信 明治三十二年九月十七日波斯國テヘラン府英旅館に於て」(113頁)

「第五信 明治三十二年十月十六日亞細亞土耳其コーニアに於て」(131頁)

## I. 家永豊吉年譜（抄）と『西亜細亞旅行記』

家永豊吉の人となりについては、参照すべき十分な好資料を見出せないながらも、たとえば内田満の著すところに拠れば、その経歴の概略は下記の通りである<sup>(5)</sup>：

1862年 筑後（福岡県）柳川生れ

1874年 熊本洋学校入学（同校は1876年閉鎖）

1876年 9月 同志社英学校入学

1879年 同志社英学校退学

1884年 渡米シオハイオ州のオバリン大学入学（1887年 6月同大学卒業）

1887年 9月 ジョンズ・ホプキンス大学大学院入学。1890年 同大学院にて博士号取得（「日本の立憲政治の発達——一八五三—一八八一年」）

1890年 帰国、ただちに東京専門学校講師に就任（1895年までの5年間。この間、慶応義塾、高等商業学校に出講）

1895年 外務省勤務（1898年まで）

1899年 台湾総督府勤務（1901年まで）

1903-05年 シカゴ大学で準教授待遇講師

1905-12年 シカゴ大学で教授待遇講師

1936年12月29日 ニューヨーク州の自宅近くの湖で事故死

■この台湾総督府在勤時に一八九九年五月から一九〇〇年三月まで二八九日間にわたってインド、ペルシャ、アジアトルコを調査旅行し、そのおりの旅行記を『国民新聞』に七回寄稿したが、これをまとめたのが、一九〇〇年一二月刊行の『西亜細亞旅行記』である（註5、内田1996a 11頁）。

家永豊吉に先んじる福島安正や吉田正春らのペルシア行の成果が当時如何ほど公表され、そしてそれらが家永本人の益するところとなったかは『西亜細亞旅行記』からは不詳である。しかし、これが「書牘」を基としていることとも関係し、したがって、従前とは異なり、家永の現地体験・観察事項が時間的にはほとんど合間を措かずして公開されている<sup>(6)</sup>。あるいは結果的ともいえるだろうけれど、「自序」に記された下記引用処は、この「旅行記」の基本的性状（筆致）として

先ずは注視されるべきであろう：

■今回記者（＝国民新聞記者、引用者註）ニ宛テタル書翰ノ儘毫モ脩飾ヲ加ヘスシテ之レヲ大方ニ示スコト、ハナリヌ（15頁）

年譜の示すところに拠れば、家永豊吉は熊本洋学校入学（12歳）、同志社英学校入学（14歳）以来、22歳で渡米、かの地で勉学、そして帰国後の在勤地が「台湾」というように、異国文化に常々対峙する境地にあった。しかしながら、家永豊吉が西アジアを實際踏査した明治時代後半期当時、西アジアについての知識・公開情報などは極めて稀有であったにちがいない。それだけに、職務上ながら、『西亜細亞旅行記』の著わす個人的見聞の速報には、当時の西アジア理解があまり潤色されることなく記されているのではないかと期待される。この度もまた、その地誌・風土的観点を読解してみることにしたい。

## II. 家永豊吉のペルシア旅程（1899 [明治32] 年）抄

『西亜細亞旅行記』の記す家永豊吉ペルシア旅程（7月20日、オマーンのマスカット抜錨後）の概略は下記の通りである（図1参照、地名表記は原文のまま）：

### 7月

- 20日 正午にマスカットを抜錨
- 21日 ペルシア湾に入る
- 24日 ブシール着
- 26日 上陸
- 29日 午後、シラズに向け出発（1週間ほどの旅程）、9時頃にシーフ着
- 30日 ハシオ着
- 31日 夜中移動、明け方にグラキー着

### 8月

- 1日 午前中休息
- 2日 カザルーン電信局到着
- 3日 タシタルゼン村発、チナル、ラダール着
- 4日 シーラーズ着<sup>(7)</sup>
- 19日 午後5時シーラーズ発
- 20日 山を迂回、ペルセポリス、午後5時前にシヴェンド着、さらにカロマバッドに至る
- 21日 パサルガダイ、ゲービッド着
- 22日 アバデー着
- 23日 19時30分エズドハスト発
- 24日 午前3時マクスドベギー着、朝食後出発、日没後マルグ着、泊る

25日 マルグ発イスファハン着、アーネスト・サトウの紹介状を領事館へ伝える

## 9月

- 6日 イスファハン発、ビブシユク泊  
7日 早朝時にビブシユク発、カシヤンの平原に入る  
8日 午前2時30分カスシアン発、午後10時にクーム着  
9日 9時30分クーム発  
10日 9時30分テヘラン着  
12日 外務大臣との会見  
14日 総理大臣面談  
16日 国王謁見  
17日 午後6時テヘラン発  
18日 カズヴィン着、泊  
19日 午後8時にチズバシチャイ発  
20日 午前2時にパチナー着、午前7時にメンジル着、午後4時にロスタナバッド着  
午後6時にロスタナバッド発、午後9時30分にクードーム着  
21日 午前2時30分にラシト着、未明にビリバザールにて端船に移る。のち汽船アスタラ号乗船  
アンザリー発。アスタラ、レッコーラン経由バクー行  
23日 午前にバクー着

家永豊吉の在ペルシア（7月24日ブシール着～9月10日テヘラン着～9月21日アンザリー発）は、たとえばテヘラン入京までに限っても、先覚者と相比べると吉田正春ら（1880年7月11日ブーシェフル入港～9月10日テヘラン入京）福島安正（1896年5月27日ブーシェフル上陸～7月3日テヘラン着～8月6日バンダレ・アンザリー出航）同様、夏季の酷暑期にあたる。したがって、宿駅間の移動はおもに日没後に行われている。その苦悩のなかにあって、人為的「異文化」を体験するのは当然、かつ、時として「夜中の旅行は頗る退屈を來たし天然の風物は平凡見るに足らず」<sup>⑧</sup>としながらも、その背景（環境）へも怠らずの注意・配慮が払われている。これらは読み手を意識したところもあったであろう。以下、家永豊吉が異郷の地で感得し日本宛に書き送った『西亞細亞旅行記』中より、おもに自然環境に関する地誌・風土記述事項（=家永豊吉記すところの「天然」）を集成してみる。ちなみにこれら以外の事項、すなわち当時の「政府政事、商業、貿易、宗教、人民の風俗習慣等」（144頁）については、「第五信」文末（144～155頁）にそれぞれの概説がある。なお、下記引用文中の「…」は、引用者による「中略」の意、また引用文頭《 》内には、便宜上その内容を見出し的に記す。

### い：7月24日「ブシール」着から8月4日「シラス」着まで（「第二信」より）

■《魚》七月二十九日…土人製の小船を僦ひシーフに向つて出發す…已にして上陸すべき處に接

近すれば灣の水は次第に淺くなりて魚の跳ること益盛なり忽ち見る潑刺たる鮮鱗余か舟中に躍入りたり東京にては「イナ」九州にては「クロメ」と呼ぶ魚にて成長すれば「ボラ」となる魚なり (47頁)

■《繁露》短き眠に就きぬ暫くして滴水余か頸に入ると覺へて…是れぞ兼て聞及ひたる波斯灣の繁き露にて…該灣に濱する地方は總て斯くぞ濕り勝なる (48頁)

■《荒漠炎天地》シーフ、ボラジユン<sup>(ママ)</sup>間の行程は…是れ坦々たる平原にして粘土に砂を混したる地は炎天に焼かれて硬堅宛も石の如し樹木山岳等の客懷を慰むべきものとは見るべくもあらず (52頁)

■《ナツメヤシ》ハシオにて…此處には棗樹<sup>デートバーム</sup>數株立てり夫の羽翼に似たる樹葉は小屋の軒端に飄飄たり (52頁)

■《逃げ水》湖水とも思はしきもの…夫の湖水は眞の湖水にあらずして幻影… (53頁)

■《暑熱》熱氣の甚しき爲めブシールにて用意したるニダース許の曹達水はボラジユンに着する前四瓶程銃聲の眞似をして破裂したりき (53頁)

■《暑熱》熱氣殊の外熾にして到底安眠に就くへくもあらず寒暖計は室内に於て華氏百十三度 (= 45℃、引用者註) を示せり (54頁)

■《硫黄の氣・暑熱・ナツメヤシ》ガラキー近く來り…硫黄の氣空氣中に充滿し痛く鼻口を刺激せり…今や余等は波斯中最も炎熱甚しき地方に位する部分に來れり四圍の山岳は箱根の如く樹木鬱蒼たらずして只黄色かゝりたる殺風景の秃山なり此幽鬱なる境中一點の清凉劑とも云ふべきものは亭々たる棗樹<sup>デートバーム</sup>相併て立つの一事にして此邊は棗樹の産地なり (57-58頁)

■《暑熱》ガラキー平原の燒地を進行せし時の極熱は終身忘却する克はざるものたり…余は傘を翳して日光を防ぐを勉めたり (59-60頁)

■《峻險な山岳》ブシール、シラス間通路中に在る著名なる四個の峻險の一にして…此等險坂は波斯語にて「コタルス」と呼ぶ…富岳の登山も此等「コタルス」に攀つることに比すれば比較的容易の業 (60-61頁)

■《清流・秃山》ガラキー河の示現するあり…其の藍色の水を見し時は歡喜眞に名狀すへからざるものありき…此時余は去年耶馬溪の好景に對し倘佯せし時を回顧せり筑後川豊國川等…幻影のみ現實に余が目前に横はる山河は夫の繁茂せる綠色は偕置き一株の灌木だも見るべからず (61-62頁)

■《暑熱》ブシールを發してより以來炎暑てふ恐るべき原素と戰ひて波斯旅行の最大難問とも云ふべき夏季旅行の危嶮 (65頁)

■《不淨の水》波斯の洗浴は二三の小盥に水を盛り…洗浴に當つる水は其不潔宛も神田川不忍池の水の如し (67頁)

■《胡瓜》カマラー<sup>ジ</sup>平原あり…此村落に至り初て田圃に似たるもの及鋤の如きものを肩にせる人を見るを得たり聞く生するところの野菜は我邦の胡瓜に類するものなり (69頁)

■《灌木の山・水田》カマラー<sup>ジ</sup>の平原を通過し…タンギトルカンの山峽を匍匐して下れり…谿



谷を出れば四山皆灌木を以て蔽はれ又時々喬木の生するあるを以て是迄三日間通過せし地方の禿山とは漸く其趣を異にせり…シヤブルの平原に青々たる水田の廣かるあり尚一層の遠距離には渺茫の間シヤブル河の碧流を認む (69-70頁)

■《橙・驛馬》カザルーンは…季候健康に適し用水の供給備はり橙、驛馬等を産す (70頁)

■《湖水》カザルーンの平原盡る處湖水あり (71頁)

■《波斯驛馬》波斯に於て最も余が感動を牽きしは…波斯驛馬の氣力と立脚の慥かなる事となり…波斯驛馬は二三百封度 (=91~136kg、引用者註) の荷を脊にし安々と此等「コタルス」を越ゆ (71-72頁)

■《道路》道路は天より降りたらんかと思はるゝ砂礫の數百代を経て驛馬が其蹄もて踏固めたる者にて (73頁)

■《柏樹》コタルトクテルの平原との中間五英里に亘りて横はり原上矮小なる柏樹繁茂す (73頁)

■《湖水・山谷》ダリエイピリシウム湖を認む湖は箱根湖に比すれば藐小なり而して其の湖心に映するものは富岳の圓錐形に非ずして此の老婦の通路の醜悪なる面貌なり四邊を繞る山岳は疊々として (73頁)

■《寒暖差》タシタルゼン平原に入る…夜に入りて冷氣膚を侵す…余は實に温度の劇變を感せり…寒暖計は百十度より七十六度 (=43.3℃より24.4℃、引用者註) まで降落せり (74頁)

■《山路・小河・樹木》興味なき山路を辿りて午時頃カナジニヤンに着し小河近く立てる樹木の下に間食をなしぬ (74頁)

■《杉・園圃》(チナルラダールの隊商合宿所を、引用者補記) 立出て、長くも行かざるに早や前方に當て寺院の圓き屋根杉の樹其中にも世に囂しきシラスの園圃を認めたり數多の園圃を通過して (80頁)

■《園圃》諸園圃を見物せり此等は孰れも外郊に在りて市の裝飾となり並に諸民歡樂の場なり (81頁)

## ii : 8月4日「シラス」着から8月25日「イスファハン」着まで (「第三信」より)

■《山路・禿山》シラスよりゼルグーンに至る道路…崎嶇たる山路上種々の形狀をなせる怪石亂巖小となく大となく轉々として讙はりぬ…蕭瑟たる禿山の下ゼルグーンの驛舎に着せしは… (87頁)

■《水質》水は…喫飲後口中に一種の感覺を起し宛も未熟なる柿を吃したる心地せらるゝ (89頁)

■《興味なき地方》ポルワー河の灌溉を受く興味なき地方を經過し…シヴエンドに着す (97頁)

■《山路》ポルワー河の奔流する山峽を通過し又峨々たる山路を踰へたり…此の山路の兩側には石灰岩の巉巖雄大なる浮彫の如く屹立し眞に壯觀を極む (98頁)

■《水質》清水余が通過せし山路はその兩側の岩石より湧出しムルガブの原野をして耕作に適せしめたり此水の純粹にして透明なる波斯渡航以來余未だ其比を見ず (100-101頁)

■《山谷》峨々たる圓錐形の五峰相併て聳ゆ其の一峰の形狀我が富岳に酷似す小富士の名稱を付



する敢て憊ならさるへし (101頁)

■《好景》落陽は此等峻岳を照らし其觀たる美麗奇異兩なから其妙を極む岳は皆禿山なるも太陽の光線は其各色を分つて山岳の斜面を彩色せり (101頁)

■《高原・平丘》吾人未曾見の形勝とも云ふべき者は高原の結構即偉大なる平丘にして此等平丘は層々相重りて夫の高岳の麓より蜿々として西方に向て斜下す (101頁)

■《月影・氈羊》嬋娟たる嫦娥充分の光輝を放つて夫の圓錐形の一峰より現す此時一隊を成して跳出したる五頭の氈羊余の前途を過きり忙しく那邊の絶壁に匿れぬ這般風光實に壯嚴美妙なり (101頁)

■《強風》デービッドはシラス、イスファハン間最高の處にありて…此等高原を通過せし時に當りて高く吹荒む風に面せり (102頁)

■《相も變らぬ景色》デービッドより…アバデーに着せし…此日の旅行は終日物の心目を慰するなく相も變らぬ景色… (104頁)

■《岩石の奇異住所》エズトハストに着せしは…此處は人間の住所としては實に奇異の地たり此の小村落は南北高原を截斷する深き一大溝渠の縁に在る延長三百乃至四百呎の岩石上に立てり此の岩石は溝渠の兩側面より隔絶孤立す (105頁)

■《甜瓜西瓜》クミシユーに於て小憩を為し甜瓜西瓜を喫するの快樂を得たりしが其味の美なる當時の余に取りては八百善の珍味よりも貴く覺へし。(107頁)

■《季候爽快》シラス及此地滞在中頗る季候爽快を覺へり…朝起若くは夜分は東京にて秋の季候と同しく…寒暖計は七八十度 (=21℃~26℃、引用者註)の間を上下し…空氣も乾燥にして澄明…夜來は蒼天雲影なく月光星輝兩なから靜亮なり (111頁)

■《果実》イスファハン天然は桃、梨、葡萄、扁桃、杏等諸種の菓實を盛に産せり (111頁)

### iii : 8月25日「イスファハン」着から9月10日「テヘラン」着まで (「第四信」より)

■《馬屍・怪鳥》ビデシユクより…カシヤンの平野に出てぬ…路上馬屍の横はれるを見き…鷲に似て然かも左程獯猛に見えざる見慣れぬ怪鳥群かりて之を喙むを見たり (116頁)

■《一樣な山路》山路は尋常一樣…嫌厭を起さしむるのみ…綠樹の見るべきもなく…鶯色の一山を越ゆるかと思へは他に同様な山あり (117頁)

■《清流・樹林・甜瓜・葡萄・林檎》クルードは…山峽を流下る清流と山峽及山の斜面を茂渡る爽快なる樹林…『天の樂園』…甜瓜、葡萄、林檎(孰れも此地の産) 麵包蜂蜜等を快食 (117頁)

■《「コーヒー」店》イスファハン、テヘラン間の道路に於て初めて「コーヒー」店の設置あり…茶なり食物なりを得る…「コーヒー」店と云ふも「コーヒー」の代りに茶を供する (119頁)

■《蠅》午前の好時期をシンシンの蒼蠅軍裡に耗費 (119-120頁)

■《一樣な山路》尋常一樣にして毫も興味なき山路を辿ること六時間許にして終にパスサンゲンに着しぬ (120頁)

■《鹹水湖》クームを出發し…テヘランに着しぬ途上最も余が注意を惹きしはホージ、スルタン

湖及びダマヴァンド山なり…余が此國に來りてより以來…廣濶なる水面を見るを得しは此の湖を以つて嚙矢とす…白波は…此時余の快心如何ぞや…鹹水の泡沫…其の詩趣を減じたり…波斯の天然物は如何に奇怪に且つ變體なるよ（122-123頁）

■《ダマヴァンド山》ダマヴァンド山は…其の形狀の雄偉と高雅とは我が富岳に酷肖す然れとも（123頁）

■《街路樹》（テヘラン）其本通は廣濶にして樹木を二列に植へて蔭影を取れり（123頁）

#### iv：9月17日「テヘラン」発から9月21日離「ペルシア」まで（「第五信」より）

■《カズヴキン平原》カズヴキンは…廣濶なる平原に在り…人工に依らすして灌漑の便備はり果實の園圃及耕地に富めり（132頁）

■《荒風・塵埃・炎熱》（カズヴキン出立後）エルビユルツ山より吹落す風は平原に吹荒みて塵埃高く颯り大陽は雲なき蒼穹より照渡りて炎熱云はん方なし（134頁）

■《エルビユルツ山景勝》エルビユルツ山上…吾人が此の山路を攀づるや歩一步四圍の景勝は雄偉と高雅とを増すパチナー河は山峽の間を流れ兀立せる山岳は相對して起伏し仰て蒼天を望めは玉兔一痕此幽境を照らして明かなり…今や此幽境に在るも胸間其の光景を弄するの餘地なかるへし（137頁）

■《風流なる村落》メンジルの風流なる村落（138頁）

■《美麗繪畫的喬樹と灌木》ロスタナバッドは即ち此地方に在り凡てメンジルよりは時々刻々地景の美麗と繪畫的とは加はりたり…今や諸山は鳶色にして枯瘦せる代りに喬樹と灌木とを以て蔽うはれたり大空も亦一天蒼々たるの代りに青山の雲影を被り或は夕陽燃へんと欲するの天涯片雲の鬚鬚たるありて觸目悉く萬里望郷の情催さしめざるはなし…余の旅魂飛んで遠く大井川若くは富士川の邊に散策せり（139頁）

■《セフキツド河》セフキツド河は其の水清からず其の流急ならずと雖其將に裏海に注かんとする處に至りては幅員遙かに富士川に優り殆ど大井川と伯仲せり（139-140頁）

■《植物繁茂》裏海に近接するに従ひ植物は次第に繁茂を極め樹木の立並べる地方に於ては青天に輝ける嫦娥の容姿をも望み見る克はざる程なり（140頁）

■《豊富なる原野》（ロスタナバッドーラシト間）豊富なる原野（142頁）

### Ⅲ. まとめにかえて

『西亞細亞旅行記』に報告の自然環境に関する地誌・風土記述事項（=家永豊吉記すところの「天然」）を集成すると、ペルシア上陸後、家永豊吉が採った当時の旅程故に不可避ともいえる酷暑に関わる描述より始まるといってもよいであろう。途中宿泊処とした「駅舎」の汚辱も加わつてのことであろうか、「華氏百十三度（=45℃、引用者註）」は安眠を妨げ（54頁）、「終身忘却する克はざる」（59頁）ほどの、それはまさに「波斯旅行の最大難問とも云ふべき夏季旅行の危嶮」

(65頁)と形容されている。

熱暑につづく脅威は山間の谷であった。「波斯語にて「コタルス」と呼ぶ」(60頁)峻険な坂を越えねばならないと同時に、流水と植生とに気付かされ、そして暫しのやすらぎをおぼえるところでもあった。以降、家永豊吉の自然観察は、「沿道の風景」(113頁)と記すように、路程上限定的でしかも多くは夜半ながら、その視界は確かな広がりを見せている。もっとも、テヘラーンに至るまでは「魚」(47頁)、<sup>デートバーム</sup>「棗樹」(52、58頁)、「胡瓜」(69頁)、「柏樹」(73頁)、「杉の樹」(80頁)、「氈羊」(101頁)、「甜瓜西瓜」(107頁)、「怪鳥」(116頁)、「甜瓜、葡萄、林檎(孰れも此地の産)麵包蜂蜜」(117頁)、「蠅」(119頁)等々の植・動物についての観察言及は確かにあるものの、やはり山容、高原、道(山路)、溪谷、川等々の地勢的状况への観察がはるかに多い。それらのうちには、家永豊吉をして「ムルガブよりデービードに至る道路に於て目撃したる景勝の雄偉且つ繪畫的なるに及ふべきものは再び余の眼眸に映ぜざりき」(123頁)と感得せしめた「天然の景勝」(123頁)が見出された。すなわち、シーラーズからイスファハーンへの途次8月20、21日、ペルセポリス遺跡やキュロス王(=家永豊吉記載「サイラス王」)の旧跡探訪を済ませ、「午後五時までムルガブに於て休息」(100頁)後の同日、「落日を戴きながら」(100頁)デービットへ向けての出立した家永豊吉が「得難き好風景に飽くを得た」(100頁)のである：

■余が通過せし山路は清水其の兩側の岩石より湧出しムルガブの原野をして耕作に適せしめたり此水の純粹にして透明なる波斯渡航以來余未だ其比を見ず吾人は許多の山路を上下して一高山に登り着しぬ此山の觀望も亦決して得易きにあらず只見る峨々たる圓錐形の五峰相併て聳ゆ其の一峰の形狀我が富岳に酷似す小富士の名稱を付する敢て僭ならざるへし時正に日夕たりしを以て落陽は此等峻岳を照し其の觀たる美麗奇異兩なから其妙を極む岳は皆禿山なるも太陽の光線は其各色を分つて山岳の斜面を彩色せり此等好景に優りて尚ほ一層雄大に尚一層奇異に吾人未曾見の形勝とも云ふべき者は高原の結構即偉大なる平丘にして此等平丘は層々相重りて夫の高岳の麓より蜿々として西方に向て斜下す漸くにして日已に没し四顧朦朧たり忽見る嬋娟たる嫦娥充分の光輝を放つて夫の圓錐形の一峰より現す此時一隊を成して跳出したる五頭の氈羊余の前途を過ぎり忙しく那邊の絶壁に匿れぬ這般風光實に壯嚴美妙なり(101頁)

種々の掲載項目もさることながら、家永豊吉のペルシア体験・報告が「世に公するの適當」(前出)とみなされた要因のひとつ、それは表現手法にあるように考えられる。すなわち、日本諸地との対照記載であって、卑近な類似、相違の具体的様を随所に著わしているためであろう。例えば「京橋浅草の街道にて見受くる圓太郎馬車即ち「ガタタタ」馬車の好模型」(134頁)あるいは「八百善の珍味よりも貴く覺へし」(107頁)などは、なぞらえ方が輕妙で理解に効する事例ではなかろうか。それはまた、「ペルセポリス」(=家永豊吉記載「パーセポリス」)遠望の描述にも活かされている：

■メルブダシトの原野を隔て、遠くパーセポリスを望見するに其規模頗る小なるもの、如く其の高き圓柱は只是れ九州の地方などにて田舎祭禮の時建併へたる或は稻荷神社に建てたる幟竿の觀

を呈せり (92頁)

この観察・表現姿勢こそは、明治期日本人宛、未知なるペルシアの「天然」情景をも生き活きと想起せしめたであろう。たとえば先に引用の自然環境に関する地誌・風土記述事項のうちには、つぎの項目が該当する事例とみなしたい：

- 《魚》東京にては「イナ」九州にては「クロメ」と呼ぶ魚 (47頁)
- 《山岳》箱根の如く樹木鬱蒼たらず (57頁)
- 《山岳》富岳の登山も此等「コタルス」に攀つることに比すれば比較的容易の業 (61頁)
- 《好景、河川》耶馬溪の好景に對し倘佯せし時を回顧せり筑後川豊國川等 (62頁)
- 《不浄の水》其不潔宛も神田川不忍池の水の如し (67頁)
- 《胡瓜》生するところの野菜は我邦の胡瓜に類する (69頁)
- 《湖水》湖は箱根湖に比すれば藐小なり (73頁)
- 《山容》湖心に映するものは富岳の圓錐形に非ずして (73頁)
- 《山容》形狀我が富岳に酷似す小富士の名稱を付する敢て僭ならざるへし (101頁)
- 《季候爽快》朝起若くは夜分は東京にて秋の季候と同しく (111頁)
- 《ダマヴァンド山》其の形狀の雄偉と高雅とは我が富岳に酷肖す (123頁)
- 《美麗繪畫的喬樹と灌木》余の旅魂飛んで遠く大井川若くは富士川の邊に散策せり (139頁)
- 《セフキツド河》幅員遙かに富士川に優り殆ど大井川と伯仲せり (139-140頁)

日本諸地との対照しての表現に関しては、テヘラーンより「カズヴキン平原」、「エルビユルツ」山系を経由してカスピ海側へ至る際の観察にも見出される。すなわち当該地景観の急変は、家永豊吉に「觸目悉く萬里望郷の情」(139頁)を誘わせたと共に、「裏海に近接するに従ひ植物は次第に繁茂を極め樹木の立並べる地方に於ては青天に輝ける嫦娥の容姿をも望み見る克はざる程なり人民にして穏順且つ外客を歡待するの念ありたらんには日本人の此地方を旅行するもの少しも不都合を感ずることなかるべし」(140頁)と思わせている具合である。9月中旬過ぎの、それまでの旅程体験に較べればはるかに穏やかな当該地の時候がおおいに影響していたのであろう。筆者もまたかつて幾度となく当該地(=「ギーラーン」)を訪れたが、その折の所感は全く同じであり<sup>9)</sup>、イラン内におけるその特異性を改めて教えられた次第である。

さて、旅程中とりわけペルシア行がいかにか家永豊吉にとって印象的であったということは、『西亜細亞旅行記』最終「第七信」文末における次の筆法から推察されるのではないだろうか：

■思ふに余が或は夫の亞刺比亞海の猛濤を渡り、或は南方波斯の恐るべき「コタル」を超へ或は炎天の下イランの高原を騎馬にて通過し或は月光に乗してエルビユルツ山を騎行し、或は沍寒を侵してトーラス及びアンチ、トーラスを横きり、歴史上著名なるユーフレチース河、チグリヌ河、ナイル河、ガンジス河等に臨み其間諸種の人種と交接し東方の舊文明を目撃したる記事にして讀者の瀏覽に供するの價値ありたらんは眞に望外の幸なり (222-223頁)

『西亜細亞旅行記』の記すペルシア国情が、それでは当時どのように世間に受け入れられていたかについては稿を改めるべきであるけれども、刊行当初「殊に波斯を縦貫したる行程の如きハ他の企及しがたき旅行にして随つて讀者を裨益する所甚だ少しとせず」<sup>(10)</sup>（ルビ省略）との評は注視すべき記録のひとつであろう。

最後に、補足的備忘ながら、家永豊吉が『西亜細亞旅行記』に引用したいくつかの文献、すなわち典拠候補について言及しておきたい。訪問経由地のいくつかについては、国勢・国情的概要の抄述もさることながら、加えて歴史的しかもかなり細微な専門的記述事項が随所に見出される。一例を挙げれば、シーラーズ出立後、アケメネス朝ペルシア期の旧跡を訪れた際の記載には「カルゾン卿」の文章からとして次の記載がある（93頁）：

■人若しパーセポリスの雄大なる前障に馬を立て已にして其廣大なる敗殿中に彷徨せは初て敗殿其物は遊客の心裡に雄偉の感を惹起するならん（カルゾン卿）

これは恐らく後記する G. N. Curzon 著書より、家永豊吉が次の一節を自ら邦訳したものとなしたい：

It is only as we ride up to the great front-wall, and still more as we wander among its megalithic ruins, that the full impression of its grandeur forces itself upon the mind. (Curzon, 1892, vol. 2, p. 153)

「ペルセポリス」に関わるアレクサンドロスの行状についてはさらに「ブルターク」のいわゆる『英雄伝』より（99-100頁）、あるいはまた「歴山王の歡宴」と題せるドライデンの歌（Dryden, "Alexander's Feast"）などをあわせて紹介（95-96頁）している。これらを所収する「第三信 明治三十二年八月三十一日波斯國イスファハン英國領事館に於て」（82頁）は、8月25日イスファハン着から9月6日イスファハン発までの間に纏められたとするならば、その効率的執筆に資する「参照文献」が手許にあったと考えられる。最終「第七信 臺北に於て」には、トルコ通関時に官憲より家永豊吉の携行書籍が押収された事の顛末をしるしている（206-207頁）。そこには、少なくとも下記4点の西アジア、ペルシア関係書籍が和文書名で見出される。いずれもそのような「和書」が当時存在していたわけではなく、これらはあくまで『西亜細亞旅行記』読者向けとして便宜上の記述である。家永豊吉自身が、旅行当時携行していたであろう、あるいは事前に参照したと考えられる典籍はそれぞれ下記のものに相当すると考えられる（印⇒以下に記す）：

■カルゾン卿著 「波斯及波斯問題」

⇒Curzon, George Nathaniel, *Persia and the Persian Question* (1892), Longmans, Green, and Co., London and New York.



■キーン氏著 「亞細亞」

⇒Keane, Augustus Henry, *Asia* (1896), E. Stanford, London.

■ニューマン博士著 「バビロン及ニ子ベ」

⇒Newman, John Philip, *The thrones and palaces of Babylon and Nineveh from sea to sea; a thousand miles on horseback* (1876), Harper & brothers, New York.

■ウキルクス醫學士著 「獅子及昇日の國 (波斯)」

⇒Wills, Charles James, *In the land of the lion and sun; or Modern Persia. Being experiences of life in Persia from 1866 to 1881* (1883), London.

*In the Land of the Lion and Sun, or Modern Persia*, 1883, London.

(引用文等において、旧字、新字および異体字等を敢えて混用したところがあること、また、固有名詞のカタカナ表記については、たとえば『西亞細亞旅行記』中、明らかに同一地名ながら不統一箇所が多く、敢えて引用箇所の「ママ」としたことをお断りしたい。)

## 註

- (1) 大津忠彦2007「明治期先覚者吉田正春とその事績—「考古学」および「西アジア」の視点より—」『人間文化研究所年報』第18号 157-169頁。  
大津忠彦2011「明治期遣波使節団員古川宣誉のペルシア体認とその背景」『人間文化研究所年報』第22号 223-235頁。  
大津忠彦2013「明治期遣波使節団員古川宣誉の観たペルシアのフローラ」『人間文化研究所年報』第24号 183-195頁。  
Ohtsu, T., Rajabzadeh, H., 2008 First Travelers to Persia, *Encyclopaedia Iranica* 14-5, Center for Iranian Studies, Columbia University, pp.556-558.
- (2) 本論中、特に断りのない場合、引用出典を示す頁番号は復刻本『明治シルクロード探検紀行文集成』(1988年、ゆまに書房)第16巻所収『西亞細亞旅行記』のそれである。
- (3) 陸軍軍人福島安正 (1852年10月27日 [嘉永5年9月15日] ~1919 [大正8]年2月19日)。1896 (明治29)年5月27日ブーシェフル港上陸後、陸路テヘラーンに入り、同年8月6日バンダレ・アンザリーよりロシア汽船にてペルシアを出国。
- (4) 実際は、1880 (明治13)年 (7月11日ブーシェフル入港) から翌年にかけて、明治新政府派遣の公式使節団 (吉田正春、古川宣誉ほか) が、カージャール朝ペルシア (1796~1925年) を訪問。爾後、古川宣誉は『波斯紀行 完』(1891 [明治24]年参謀本部)、吉田正春は『回疆探險波斯之旅』(1894 [明治27]年博文館) を著している。
- (5) 内田満 1996a「忘れられた先駆者・家永豊吉 (上) 現代アメリカ政治学形成期の目撃者」『UP』第25巻第5号 6-11頁 東京大学出版会

内田満 1996b 「忘れられた先駆者・家永豊吉（下） 現代アメリカ政治学形成期の目撃者」『UP』  
第25巻第6号 16-19頁 東京大学出版会

- (6) 註(4)参照。なお、福島安正による1896（明治29）年の成果は、「軍事機密のため非公開とされ、のち一九四三年一部が太田阿山編『中央亜細亜より亜拉比亞へ』として刊行されたにとどまった」（杉田英明1995『日本人の中東発見』東京大学出版会143頁）。
- (7) シーラーズ到着日時の明確な記載がなく、到着前後の記述内容より8月4日と判断した。
- (8) 例えば「エズドハスト」より「マクスドベギー」までについて（106頁）。また、「日没前ともなりぬれば再び驛馬に跨り午後十時前クームには着きぬ…街衢を通過せしは夜中なりしを以て余は多くの市の景況を窺知するを得ざりし」（120-121頁）といった具合である。
- (9) 「もし日本人がそこを訪れたならば、広やかな稲田、茶畑あるいは夏季山峡の岩清水や傍らのあずまやに、異郷に在ることをひととき忘れ、得も言われぬ安堵感をおぼえるにちがいないであろう。」（大津忠彦 1998 『ギーラーン 緑なすもう一つのイラン』[中近東文化センター]所収 4頁）
- (10) 1901（明治34）年2月16日付『東京朝日新聞』所収「新刊各種」欄

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）